

# 草の芽句会だより

NO, 188  
24、5、9

晩酌の肴新豆の真子まぶし  
それぞれの色にきらめく庭若葉  
惜春の小鳥の遊ぶ城広場

範子

桐の花遠くに咲きて空澄みぬ  
合歡の木の実房残して芽吹き初む  
鼠木戸潜れば春の大芝居

純子

大手門新樹の木々のせまり来る  
新緑の城上りをる二人連れ  
足ばやに城ウォーキング五月晴れ

貞子

ぼつりんと人力車ある城若葉  
いっばいの緑に天守かくれけり  
母の日の子なき姉にもカーネーション

禮子

落花舞ふ午後の日射す無人駅  
義母の忌の近付くあやめ濃紫  
自転車の稽古見守る子供の日

剋子

出席者

吉崎 森 川原 馬場 小山



城山は若葉に覆われていた。見上げる天守閣も若葉に包まれて見えない。濠の水も城山を写して緑色だ。青空を鯉幟が泳ぐ。緑の濠にもくつきりと姿を映し悠々と泳いでいる。  
大手門広場を爽やかな風が吹き抜けていく。人力車が一台停めてあるのもいつもの景である。  
若い親子が見返り坂を駆け上がって行く。「昔は私も天守閣まで駆け上ったなあ」「もう歩くのがやつとやがな」「合歡を見に行ってみようよ」「花はまだでも蕾はできとるかもしれない」  
若葉の広場でブランコに乗ってみる。青空を見上げて揺られていると、なんだか昔に還ったような気がしてきた。長年見慣れてきた城山の風景だが、私たちには毎年なにやら新しいのである。夏はもう近い。